

パースでの生活をおえて

1. 研修に参加した目的

いわゆる理系と呼ばれる工学の分野でも、英語ができることには大きなメリットがある。人と話したり、本や教科書を読んだり、仕事をするときには、選択の幅が一気に広がるだろう。そのため、最近は数学や物理だけでなく英語にも力を入れるようになった。特に英会話は授業で取り上げることが少ないため、自分で勉強する必要があると感じていた。今回の研修では、実際に現地に行き、本物の英語に慣れることと、何を勉強していけばいいのかを見つけるきっかけにしようという思いで参加した。また、海外に渡航経験がないため、外国と日本の違いを見つけるきっかけや、新しい経験をすることも目的である。

2. 研修の内容

パースでの生活

- ・カーティン大学までは都市大の人と行動。このときにもっと友達を増やすべきだった。英語漬けにするために日本人とはしゃべらないという考え方もあったと思うが、観光などでスケジュール的に日本人しかいない時もあるので、友達は作った方がストレスは少なくなるだろう。最後の一週間おなかを壊していたのは、ストレスがあったからと思われる。
- ・パース空港に到着した時は、思ったより暑く感じた。ただ空港や機内、室内は寒いときもあるので上着よく着ていた。



・日差しが強く、肌が焼けるスピードが速い。日焼け止めは持ってなかったが、何回か借りた場面はあった。サングラスはメガネの上から付けられるものを用意。観光など、屋外に多くいる日は使用した。

・パースの街は日本より穏やかで、忙しい感じはなかった。昔ながらの落ち着いた建物や、高級な店も多々あり、人は大勢いたがよい雰囲気だった。

・町の人とはとてもフレンドリーだった。楽器屋の店員にどんな音楽が流行ってるか聞くと「いろいろだよ、ロックはACDCとか…」と笑顔でこたえてくれたり、「日本に、スーツケースに入らなかった服を送りたいんだけど」と聞くと「この箱に入れて…」と分かりやすく教えてくれたり、とにかく全員が笑顔でフレンドリーだった。



・フリマントルは少しゴミゴミした印象だった。市場や広場では人が多く、間を縫うように歩いた。パースは日本にないような穏やかさを感じたが、こちらは日本でも感じるざわざわした雰囲気だった。

・観光で他の日本の大学と合同で行ったロットネス島は、とにかく暑かった。晴れていて日差しが強く、この1日だけで肩や背中のカワがむけるほど日焼けした。自転車で島を回れたが、一緒にいた友達とは別れて、別のグループとビーチで過ごしていた。海水は冷たく、少し寒くも感じた。海パンやタオルは、少し高いが島で売ってるものをその場で買った。

ホームステイ

・ホームステイ先の家族は両親とその娘、ブラジル人の留学生3人と同じ研修の東京都市大生、ラブラドルレトリバーのやんちゃな子犬がいた。外国の留学生がいたら、コミュニケーションは英語でとるしかないので、ぎこちない英語同士で一生懸命話すことも楽しかった。

・朝食は、自分たちで用意をするように言われた。パン、ジャム、バター、砂糖とコーンフレーク、ミルクの場所、トースターの使い方を教えてもらい、朝は食器も自分たちで洗った。自分は焼いたパンの上にバターを塗り砂糖をかけたもの、コーンフレークにミルクと砂糖をかけたもの、冷蔵庫についていた冷水器の水、キッチンに置いてあるフルーツという毎朝同じメニューを食べていた。

・昼食は、毎日ステイ先の両親が作ってくれた。外で食べる予定でいないときは事前に連絡をした。毎回サンドウィッチで、卵が入っている時はだいたい殻が入っていた。

・夕飯もステイ先の両親が作ってくれた。大きめの皿の上にタイ米をよそり、その上に豆のカレーか、ふかしたジャガイモか、チキンをのせて食べるのが定番だった。その他にも、チキンとハッシュド・ポテトの時や、日本のように腰がある麺ではなく、どこかパサパサしたパゲッティの時、忙しそうな時にはハンバーガーとポテトの日もあった。

・夕飯の時は食器洗い機を使うように言われた。

・シャワーは5分で入るよう言われたが、急いでも毎回7～8分はかかっていた。ただ、無駄に水を使わないよう気をつけたし、それに対して文句を言われることもなかった。

・ホームステイと外出することはめったになかった。トマト湖という池に朝早くブラックスワンを見に行ったことが唯一それらしいことだろう。ブラックスワンは結局いなかったが、野生のペリカンや、スズメよりも小さな小鳥など日本にはいない鳥を見れたし、地元の人がランニングや散歩で使う、緑がきれいな公園になっていて、有名な大きい観光地というわけではないが、いい思い出になった。

・帰る前に、スーツケースに入らない荷物5キロほどを郵便で送るときにも車で郵便局まで連れて行ってもらった。5キロで8～9000円することには驚いた。そのあとに2・3件スーパーを回って買い物に同行した。この二つだけがステイ先の両親とした外出だった。

・帰りは、カーティン大学までステイ先の両親が車で送ってくれた。

カーティン大学での英語研修

・英語のクラスは、東京都市大生が自分しかいないクラスに入った。ほかのクラスメイトには、京都産業大、和歌山大の日本人や、サウジアラビア人、韓国人、台湾人がいた。日本人は、文法などはよく知っているが、話したり聞いたりすることが苦手で、外国人はそ



の逆の印象を受けた。

- ・自分は英語が得意ではないが上級のクラスになって、授業についていくことがやっとだった。クラスの雰囲気はよく、わからないとことをクラスメイトに聞くと親切に教えてくれた。ただ、出身国によってなまりがあり、聞き取ることも大変だった。

- ・宿題も出され、スクリプトを渡され予習をしたり、10分間のプレゼンテーションの準備をしたりした。テキストの内容自体は難しくはなかったが、とにかく話したり聞いたりすることが苦勞した。

3. 研修をおえて

カーティン大学の英語研修では、単語数の少なさ、聞き取る能力、話す能力が低いことが分かった。逆に、授業を受けずに、店でものを買ったり、ホームステイ先の人と話すことについては思ったより不自由がなかった。自分の英語に少し自信がついたし、やるべきことも分かった。

パースでの食事は少し苦勞した。味はしっかりあるが旨味がないというのか、やはり日本食とは全く違った。原因は不明だが、最後の一週間で腹を壊した理由はストレスだと思うし、慣れない味を食べ続けたことは少々きつかった。

日本人は親切で思いやりがあるとよく言われるが、パースの人にも当てはまるだろう。むしろ、明るく接しやすいような雰囲気で、何を聞いてもしっかり答えてくれた。

パースでの生活を通して、話す言葉は異なるけど、日本人や外国人の間にあまり大きな差はないように感じた。しっかりしてる人はしっかりしてるし、逆に電車の中で大声で話す人はパースにもいる。想像していたほど異次元な世界ではなく、もっと身近なものだと感じた。

